ウミガメと共に生きる

ー地域でつなぐ命ー

御前崎には、地域や学校が力を合わせて守り続けてきた命があります―。

半世紀にわたり続くウミガメの保護と飼育は、自然と共に生きるまちの誇りとして、住民に受け継がれています。

御前崎とウミガメの関係

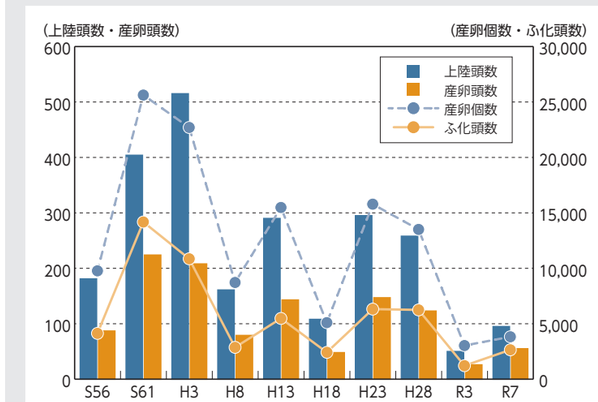
御前崎市は、三方を海に囲まれており、遠州灘から駿河湾まで約21キロの海岸線が続いています。毎年初夏を迎えると、砂浜にはたくさんのウミガメが産卵のために上陸します。最盛期には、市内で224頭が産卵し、約1万4千頭がふ化しました。

御前崎の海岸は、多くのウミガメが産卵に訪れる日本の北限地にあたります。昭和55年3月には、学術的に貴重であるということから、上陸するウミガメとその海岸が「御前崎のウミガメ及びその産卵地」として、国の天然記念物に指定されました。

一方、本市に産卵のために訪れる「アカウミガメ」は、世界的に見ても、個体数の減少が著しく、絶滅危惧種として、国際自然保護連合が作成するレッドリストに掲載されています。

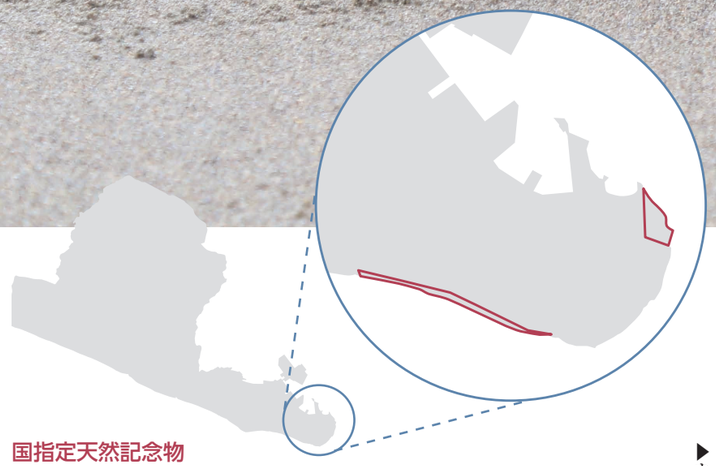
そのウミガメの保護を目的に、昭和47年、御前崎町教育委員会は「ウミガメ保護監視員」として2人を委嘱しました。活動は50年経った今でも続いており、延べ32人の監視員が命をつなぐ活動に従事してきました。また、御前崎小学校でもウミガメを知り、守っていくことを目的に、昭和52年から児童によるウミガメの飼育活動が続いています。

※監視員と御前崎小学校は、静岡県知事の許可を得て活動しています。



市内における上陸・産卵・ふ化頭数の推移

※昭和56年から平成19年までは御前崎地区のみ計測。平成20年以降は浜岡地区も含めた数値。



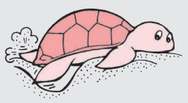
国指定天然記念物
「御前崎のウミガメ及びその産卵地」

下岬区と薄原区の海岸の一部が指定されている。他の指定地は徳島県海部郡美波町。国の天然記念物には指定されていないものの、沖縄県や鹿児島県、高知県、宮崎県などでも多くの産卵が確認されている。

▶ウミガメの産卵

＼ウミガメの生態 ～産卵の仕方～／

波打ち際で上陸場所を探して、安全を確かめてから上陸。人影を見つけると海へ帰ってしまう。



左右の後ろ足をシャベルのように使って直径20cm、深さ50cmくらいの穴を掘る。

平均120個の卵を産む。卵はピンポン玉くらいでブヨブヨしている。

「右前足、左後ろ足」「左前足、右後ろ足」というように砂をかける。最後に前足で平泳ぎのようにして砂をかけ、どこに産卵したかわからないようにする。

疲れた体を少し休めては歩き、ゆっくり海に帰る。シーズン中、2～3回産卵する。

守りつなぐ命

ウミガメの命を一つでも多く守る

市教育委員会は現在、8人をウミガメ保護監視員として委嘱しています。

監視員は、5月から8月までの産卵シーズン中、毎朝4時から5時にかけて担当区域を巡視し、砂浜に残るウミガメの足跡から産卵場所を探します。産卵跡を見つけると、高波やキツネなどの外敵の捕食から守るため、卵を掘り起こし、ふ化場(下岬区)に埋め直します。地温が高くなりすぎたり、冷たくなりすぎたりするのを防ぐため、水をかけるなどの管理をしています。卵がふ化するまでには約2カ月間かかり、8月から10月までのふ化シーズンは、早朝の海岸巡視に加え、当番制で朝と夜にふ化場を巡視しています。

本年度は、新たな方法として「自然ふ化」にも取り組みました。ウミガメの性別は、「砂中温度が29度付近を超えるとメスになる」といわれています。同じ場所での卵の管理は、性別が偏る恐れがあるため、15個の巣穴を自然ふ化で見守り、約千頭の子ガメを誕生させました。

ウミガメを取り巻く自然環境は急速に変化しており、近年、世界的に産卵頭数が激減しています。本市も例外ではなく、令和3年度には過去最少の産卵頭数26頭を記録。本年度は、上陸95頭、産卵55頭、ふ化2647頭となっています。

生命の連鎖は、自然の摂理のもとで続いてきたもの。本来は人の手が加わらないことが理想といえます。しかし、監視員の保護活動によって守られた命があることも、確かな事実です。監視員は、ウミガメの命を未来へつないでいくため、国内外から情報を収集し、自然の摂理を尊重した取り組みに挑戦しています。

御前崎市ホームページ
「御前崎のウミガメ」

令和7年3月には、本市の保護活動などをまとめた「御前崎市ウミガメ保護マニュアル」を作成しました。

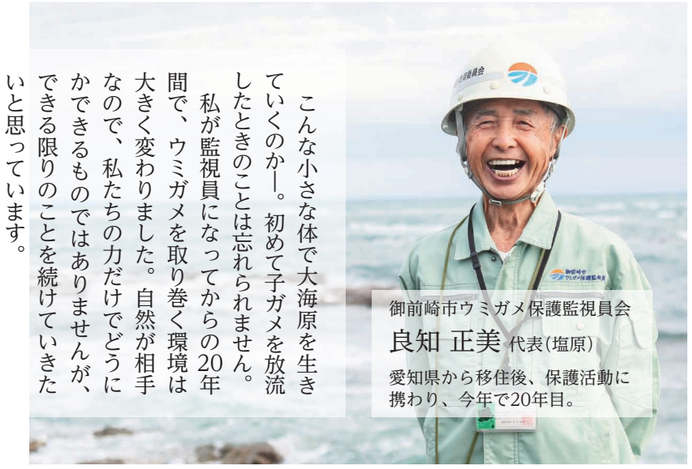
子ガメ供養祭
（5月）
前年度にふ化できなかった卵やすぐに亡くなってしまった子ガメを供養するとともに、本年度の活動の安全を祈念する。

上陸・産卵確認
（5月～8月）
毎朝4時、担当区域を巡視し、ウミガメの足跡を探す。産卵を確認したら卵を掘り起こし、ふ化場へ埋め直す。

保護活動見学会
（7月）
啓発活動として、早朝巡視の見学会を実施。運が良ければウミガメや前日夜から当日朝にかけて産卵された卵と遭遇できるかもしれない。

ふ化確認
（8月～10月）
初産卵から約2カ月後、ふ化シーズンへ入る。朝晩の巡視時にふ化を発見したら海へ放流する。子ガメは、海に向かって一斉に歩みを進める。

卵の掘り起こし
（10月）
無精卵やふ化できなかった卵を掘り起こし、来シーズンに向けてふ化場を整備する。



こんな小さな体で大海原を生きていくのか―。初めて子ガメを放流したときのことは忘れられません。

私が監視員になってからの20年間で、ウミガメを取り巻く環境は大きく変わりました。自然が相手なので、私たちの力だけでどうにかできるものではありませんが、できる限りのことを続けていきたいと思っています。

これからは、時代や環境に合わせた活動を考えていく必要があります。今年は自然ふ化に挑戦しました。ふ化した子ガメの中には、街灯の明かりに誘われて海とは反対側に歩いていってしまう個体もいて慌てて救出しました。ウミガメにとってより良い環境を整えていくことも大切だと感じました。

保護活動をもっと多くの人に知ってもらいたいです。命の尊さや環境を守ることの必要性を考えるきっかけになればうれしいです。

御前崎市ウミガメ保護監視員会
良知 正美 代表(塩原)
愛知県から移住後、保護活動に携わり、今年で20年目。

みんなで支えるウミガメの未来

ウミガメに迫る脅威

全てのウミガメ類は、「ワシントン条約の附属書Ⅰ」に掲載され、輸出入が禁止されています。ウミガメの成長はゆっくりで、成熟するまで約40年かかるため、個体数が減ると回復に長い年月を要します。かつては乱獲が脅威でしたが、今では漁業による混獲や海岸開発、砂浜侵食、光害など人の暮らしと関係するさまざまな要因が影響しています。

近年の気候変動も、ウミガメに深刻な影響を与えています。温暖化が進み、砂中温度が高くなるとメスばかりが生まれ、繁殖が難しくなる恐れがあります。砂の温度が上がり過ぎれば、ふ化そのものが難しくなることもあります。さらに、海面上昇によって産卵場所である砂浜が失われる危険性もあります。

協議会では、上陸や産卵の調査を続け、漁業や海岸開発などの関係者と協力しながら、脅威の軽減に取り組んでいます。課題は人・モノ・お金の不足ですが、地域の理解と協力があれば、きっと乗り越えられるはずです。

御前崎が育む安全な海岸

御前崎海岸は、海に迫る台地が陰を作っており、暗く静かな環境がウミガメにとって安心できる場所なのだと思います。そして、監視活動や小学校の飼育など、地域ぐるみでウミガメを見守る文化が根付いている。これは全国的にも誇れる取り組みです。

一方で、常に最新の科学的知見を学びながら、動物福祉や自然の摂理を踏まえた活動を考えていく必要があります。本来、人の手を借りずとも自然の中で命をつないできた生き物です。人が「守らなくてもいい状態をつくること」が理想といえるでしょう。

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会
松沢 慶将 会長

京都大学農学部で水産学を専攻。経験のために始めたウミガメ産卵生態調査と日本ウミガメ会議に集う「ウミガメ屋」たちの魅力にはまる。和文誌「うみがめニュースレター」編集長、国際ウミガメ学会会長などを歴任。

日本ウミガメ協議会

1990年、日本各地でウミガメの調査に関わる人たちによって設立された。調査・研究結果を基にウミガメやウミガメを取り巻く生態系全体を保全できる効果的な方法を模索している。

▲日本ウミガメ協議会ホームページ

＼こんなときはどうしたらいい？／

ウミガメと遭遇した！
▼
光で照らさない静かにその場を離れる
親ガメは特に警戒心が強く、些細な刺激(光や音)で産卵を諦めて、海に帰ってしまう可能性があります。

ウミガメや産卵を見てみたい！
▼
ウミガメを守るため見に行かないようにしてください
ウミガメはデリケートな生き物です。また、産卵が多い夜の海は暗くて危険を伴うので、見に行かないようにしてください。

足跡や産卵床を見つけた！
▼
卵を採掘しない
卵の採掘は法律により禁じられており、違反すると罰則対象となります。監視員が保護していますが、万が一発見した場合は社会教育課までご連絡ください。

死んだウミガメを砂浜で見つけた！
▼
社会教育課へご連絡を
市職員や監視員が現地へ出向き、埋葬します。
社会教育課
☎0537 ㉙ 8735

育て、学ぶ命の尊さ

48年間続く命の教室

御前崎小学校では、児童がウミガメの子ガメを飼育するという全国的に珍しい活動に取り組んでいます。

この活動は、昭和52年に「ウミガメ観察クラブ」として始まりました。発案者は、のちに「ウミガメ先生」と親しまれ、監視員も務めた同校の河原崎芳郎先生です。第二次世界大戦の出征を経験し、「生きることの尊さ」を実感していた河原崎先生。「ウミガメ先生奮闘記―アカウミガメを追って―」(昭和56年発行)には、「安心して産卵できる環境を作りたい。ウミガメを知ることで関心が高まり、ウミガメを守りたい気持ちにつながるはずだ」という思いが記されています。

現在は、「カメ当番」と名を変え、9月に監視員会からふ化したばかりの子ガメを受け入れ、学級の活動として飼育しています。4・5年生合わせて54人の児童によるカメ当番。昼休みになると、当番の児童は運動場横のカメ小屋へ駆け足で向かい、水温や塩分濃度を測ったり、エサを作って食べさせたりします。休日も保護者の協力を得ながら世話をします。

活動は世代を超えて受け継がれ、今年で48年目。6月には、大切に育てた子ガメを両手に抱え、「また帰ってきてね」などと声をかけながら海へ放流します。約9カ月の飼育を通じて、子どもたちの心にはウミガメを守る気持ちや地域への愛着心が育まれています。

1_本年6月、放流直前の成長した子ガメの甲羅をブラッシングする児童／2_休日も欠かさず実施されるカメ当番。日誌へ飼育項目に漏れがないか、子ガメに異変がないか、書き込んでいく／3_飼育方法を支援してくれているアクアショップ・ホワイトハウスの秋野さんから教わった配合で生魚や栄養剤を混ぜ合わせ、エサを作る／4_昨年9月から飼育してきたカメを6月10日に放流した

◀実寸大の子ガメ。本年度は9月18日にウミガメ保護監視員会から前日にふ化した10頭の子ガメを受け入れた。放流するころには20cmほどまで成長する。

カメは笑顔にしてくれる大切な存在

エサをうれしそうに食べてくれる姿がかわいくて、見ているだけで癒されます。でも、ブラッシングは少し苦手なのか足をじたばたさせるので少し苦戦します。

飼育を始めて1カ月ほどですが、最初は黒かった甲羅が少し赤黒くなってきて、「大きくなったなぁ」と成長を感じます。飼育を大変だと思ったことはありません。毎日お世話をしていると、小さな変化にも気付けることがうれしいです。放流するときには、もっと大きく成長しているはず。元気に海へ帰って、強く生きてほしいです。

落ち込んでいるとき、子ガメを見ると自然と笑顔になれます。子ガメは僕たちに元気をくれる大切な存在です。きっと大人になっても、この経験をずっと覚えていると思います。

御前崎小学校５年生
赤澤 知哉 さん(上岬区)

ウミガメの飼育活動は教育の中核

教室では子どもらしさを感じる児童ですが、カメ小屋で世話をする姿はグッと大人らしさを感じさせます。自発的かつ自立的な活動の中で、責任感が養われているのだと思います。

放流時には、児童の表情からウミガメの成長へのうれしさと寂しさが入り混じった感情が見られます。生命を大切にする心や海を綺麗にしようとする心、飼育をやり遂げた誇らしさなど、飼育活動で得られるものは、他に代えがたいものです。また、地域や保護者の理解と協力は、48年間の積み重ねで得られた賜物でしょう。

飼育活動は、本校の学校教育の中核を担っています。これからも、学校と地域でオンリーワンのウミガメ飼育活動を続けていきたいと思います。

御前崎小学校
田代 久美子 校長

活動の輪は今も続いている

小学5年生のとき、河原崎先生とウミガメ観察クラブでウミガメの飼育をしていました。当時の観察クラブは4～5人。放課後のエサやりを忘れて、夕食中に先生から「カメはまだご飯を食べていないよ」と電話がかかってきたことを今でも覚えています。振り返ると、飼育活動の中で自然と命の大切さを学んでいたように思います。

22歳から10年間は先生の誘いで、監視員を務めました。当時の子どもが大人になり、その子どもも飼育活動を経験している。活動の輪が今もつながっており、地域でウミガメや自然環境を守っていることを実感します。47年前の命の学びが、今も形を変えながら受け継がれていることを思うと、とても嬉しく、誇らしい気持ちになります。

47年前、観察クラブとして飼育
牧野 敏和 さん(白羽区)

＼御前崎小学校のウミガメ飼育に協力／

秋野 友美 さん
ホワイトハウス(牧之原市)
エサや水温の指導、設備メンテナンスなどを支援

伊村 洋之 さん
(大山区)
水槽の清掃やエサ作りを支援

松林 義樹 さん
(上岬区)
水槽用の海水を市場から運搬

大石 有佳子 さん
(上岬区)
水槽清掃を支援

大澤 真琴 さん
(大山区)
水槽清掃を支援

NOK株式会社
(牧之原市)
令和7年9月に水槽用のろ過装置を寄付

安心して産卵できる海岸を守るために

人々の暮らしによる海への影響

かつて広々としていた御前崎の砂浜は、今少しずつ姿を変えています。68年前と比べると、波の力や地形の変化などといった多くの要因により、砂浜の面積は年々せまくなっています。砂浜は、ウミガメが産卵に訪れる大切な場所です。きれいな砂浜と静かな環境が保たれることで、ウミガメは安心して産卵することができます。

もう一つの大きな問題が、海洋ごみです。風に飛ばされたビニール袋やペットボトルのキャップなどは、やがて海へ流れ着きます。ビニール袋などをクラゲと間違えて食べてしまったウミガメが、消化できずに命を落とす例もあります。こうした海洋ごみは、その約8割が陸から出たもの。人々の暮らしの影響で海の環境は傷ついているのです。

1957年当時の御前崎海岸

現在の御前崎海岸

ウミガメの未来を守るために

市内では、行政や学校、市民団体が中心となって海岸清掃や啓発活動などの環境保全に取り組んでいます。御前崎中学校では、「亀バックホーム大作戦」と称した海岸清掃が実施されています。毎年、産卵シーズン前の5月上旬に実施され、昭和45年の開校以来、55年続く伝統となっています。

ごみを出さない・持ち帰る、夜の砂浜にライトを向けないなど、小さな心がけがウミガメの未来を守ります。

御前崎で生まれたウミガメが安心して帰ってこられるように、私たちひとりひとりができる行動から始めましょう。

死んだウミガメの胃袋から発見されたプラスチックごみ
（提供：日本ウミガメ協議会）

＼私たちにできること／

1 ごみを出さない・捨てない・拾う

陸でポイ捨てされたごみは、雨や風などにより川や排水路を通り、海へ流れ着きます。「出さない・捨てない・拾う」でごみのないまちを目指しましょう。

市は、「御前崎マイボトルプロジェクト」として、オリジナルボトルを製作しました。売上金の４％（80円）は御前崎の海を守る活動に募金されます。

デザイン　市内在住アーティストJiroさん
販売場所　御前崎渚の交番、道の駅風のマルシェ御前崎、観光物産会館なぶら館、海鮮なぶら市場、イタリアンジェラート・マーレ

御前崎渚の交番では、市内で開かれる海岸清掃やリサイクル活動をまとめた「御前崎市環境カレンダー」を作成。気になる活動をチェックしてみよう！

2 生活排水に注意する

調理ごみや油を、シンクに流さずふき取ってごみとして処分することで、海洋汚染を防ぎ、豊かな海を守ることができます。環境に配慮された洗剤の使用も効果的です。廃油は市で回収しています。

回収場所　市民課、御前崎支所

ウミガメが安心して帰ってこられる環境を守りたい

楽しみながら守る 未来へつなぐ御前崎の海

NPO法人
Earth Communication
川口 眞矢 代表（新谷区）

久々生（くびしょう）海岸で環境調査や生き物観察会などの啓発活動を実施し、海岸保全に取り組んでいます。９月には、国の「自然共生サイト」に認定されました。楽しみながら、子どもから大人まで一緒に、美しい御前崎の海を未来へつなげていきたいです。

問合先　川口 眞矢
☎090(5636)0227

自然共生サイト　ホームページ

ウミガメが来る海は 御前崎の誇り

心がすっきり御前崎で夢拾い
伊村 俐香 さん（大山区）

海洋ごみは拾っても拾っても毎日流れ着いてきます。果てしない作業ですが、「今拾わなければまたどこかの海岸に流れ着いてしまう。今が拾うチャンス」とポジティブに捉えています。ウミガメが来る海は御前崎の誇り。守っていくべきものだと思います。

活動日時　奇数月第２日曜8:30～9:00／下岬海岸
偶数月第３火曜8:30～9:00／灯台下海岸または
マリンパーク御前崎
問 合 先　伊村 俐香　☎090(7614)3165

ホームページ

ごみ拾いをきっかけに まちのことを考えてみてほしい

OMAEZAKI
BEACH CLEANUP
中山 琴乃 さん（中町）

毎日一人でごみ拾いをしている人たちを見て、私にできることを考えた結果、海岸清掃グループを立ち上げました。みんなと月１回ならできるかも、その思いからでした。ごみ拾いをきっかけにウミガメや地域、環境問題などに目を向けてほしいです。

活動日時　不定期（毎月１回）
※ホームページをご確認ください。
問 合 先　中山 琴乃　☎080(9119)2377

ホームページ

ウミガメのために何ができるのか 考える必要がある

私生活では、本年度から
監視員として従事

御前崎渚の交番
増田 洋樹 さん（中原区）

水上オートバイでのパトロールの際には、水面に浮いているごみを拾うなど、海を守る活動に取り組んでいます。本年度からは監視員となり、ウミガメと住民との強いつながりを改めて感じました。ひとりひとりがウミガメを守るために何ができるか考える必要があると思います。

営業日　９時～18時　※水曜定休
問合先　御前崎渚の交番　☎0548㉓9927

ホームページ

1_ 飼育している子ガメを愛おしそうに見つめる児童／ 2_ 早朝、御前崎海岸に上陸し、海に帰っていく親ガメ／ 3_6月15日に広沢区の海岸で今シーズン初の産卵を確認。8月14日に128個の卵から92頭の子ガメが初ふ化した／ 4_7月12日から21日にかけて５日間開かれた保護活動見学会には県内外から168人が参加。卵の掘り起こしの模擬体験をする参加者／ 5_令和５年７月、御前崎小学校開校150年を記念し、当時の５・６年生が塗装のボランティア団体「NPO法人塗魂ペインターズ」の協力を得て、御前崎の風景を施したカメ小屋／ 6_ ５月から10月の早朝巡視後にふ化場で開かれる監視員の定例会。巡視活動は個々で実施されるため、月に２回集まり、情報を共有する

ウミガメの保護を通じて御前崎で育まれてきた

「命を大切にする文化」

地域に受け継がれてきた思い

監視員の見守りや児童の飼育活動、住民の清掃・啓発など、ウミガメを守るための活動は、今も止まることなく続いています。牧野さんが話したように、「ウミガメを守りたい」という思いと活動の輪は、大人から子どもへ、子どもからそのまた子どもへと受け継がれてきました。

海岸の形が変わっても、ウミガメの数が減っても、この思いと活動の輪は受け継がれていきます。御前崎では、長い年月をかけて「命を大切にする文化」が育まれてきたのです。ウミガメと人とが共に生きる風景は、御前崎が誇るべきもののひとつです。

私たちの行動は、人間社会だけでなく、自然環境などにも大きな影響を与えます。文化や環境問題に目を向けるときっと新たな気づきがあるはずです。そして、行動し、互いの調和につなげていくことが大切です。

人々の手で守られ、心に受け継がれてきたこの文化を次の世代へ。ウミガメが御前崎の海に帰ってこられるように。これからも、ウミガメと御前崎との歩みは続いていきます――。

【特集】ウミガメと共に生きる
―地域でつなぐ命―　終